# 浦賀文化

平成27年（2015年）1月1日

第40号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp


## 愛宕山公園

**浦賀病院の裏手にある愛宕山は、春には桜が咲き、バス通りからもピンクに染まった姿を眺めることができます。その山にあるのが愛宕山公園で、横須賀では最も古い公園です。**

西浦賀の一帯に小高い丘が見えます。この丘の周囲には、元禄のころ三浦半島を治めた代官・長谷川七左衛門長綱が徳川家康の命令を受けて三浦半島の土地調査をした際に陣屋を設けたと伝えられています。現在その跡は残っていませんが、かつては陣屋山と呼ばれていました。陣屋山には愛宕神社が設けられていたことから愛宕山と呼ばれるようになり、人々の憩いの場所として親しまれてきました。

「愛宕」というのは、火伏（ひぶせ）（火災を防ぐこと）の神を意味することから、神社の名称も地域の火災予防を願って付けられたものと思われます。

愛宕山からの風景は、今でこそ周囲に木々が生い茂っていますが、かつては浦賀の湊を一望することができる絶景の場所だったことと想像されます。春には桜やツツジが咲き乱れ、秋には対岸に臨む東叶神社の紅葉が美しく、東西浦賀を行き来する渡し船が風趣を添えています。

明治二十四年には「浦賀園」と呼ばれる公園が開設されました。今でも紺屋町の側にある入口には「浦賀園」と書かれたアンティークなゲートが見られます。この公園は、わが国造船工業の父と呼ばれる中島三郎助の功績を顕彰する目的で造られたといいます。それを表わすかのように、山頂には「中島三郎助招魂碑」が建てられています。

◇　◇　◇

江戸時代の浦賀には干鰯問屋や廻船問屋などの商人が活躍していました。その後、造船を主体として工業の街へと変わっていきますが、時代を超えて湊を見つめてきた愛宕山は浦賀のランドマークといえるでしょう。

浦賀園のゲートをくぐり、通称「あたご稲荷」と呼ばれる「宝船稲荷」の祠を右に見て、階段を上がって行きます。中腹左側には台形を逆さにしたような石碑があります。これは「咸臨丸出港の碑」です。この碑は、昭和三十五年に日米修好通商条約の締結百周年を記念して建てられました。碑の先端部分は、幕末に太平洋を横断した咸臨丸の目的地であるサンフランシスコ方面を指しています。また、裏面には、勝海舟や中浜万次郎、福沢諭吉ら乗組員の名前が刻まれています。

ツツジに包まれた階段をさらに上ると、頂上の平地に着きます。この一角には、先ほど述べた「中島三郎助招魂碑」の威容が見えます。高さが四、五メートルほどもあり、三浦半島最大の石碑とされています。この石碑には、中島三郎助が明治二年に、函館千代ヶ岡の砦において二人の息子とともに戦死したこと、ペリー一行が浦賀沖に現われたとき、浦賀奉行所の異国船応接掛として最初に黒船に乗り込んで折衝したこと、そのときに船内を観察した経験を生かしてわが国最初の洋式軍艦、鳳凰丸の建造に当たるなどの功績を残したことなどが書かれています。

また、長崎海軍伝習所の一期生として派遣され、勝海舟らとともに航海術や造船などを学び、のちに軍艦操練所の教授に迎えられたこと、徳川家に忠誠を誓い烈士の気風に生きた浦賀の武士・中島三郎助の人生を表現しています。

頂上の広場には、もう一基、大きな石碑があります。これは、情熱の歌人として知られる与謝野鉄幹・晶子夫妻の歌碑です。昭和五十九年に、横須賀市の文化行政の一環として建てられました。碑に刻まれた二首の短歌は昭和十年の二月末ごろの寒い時期に、夫妻が観音埼灯台から浦賀や久里浜を訪れた日帰り旅行の際、愛宕山から眼下に見える浦賀ドックを眺めたときの情景を詠んだものです。

**黒船を恐れし世などなきごとし**
**浦賀に見るはすべて黒船**
与謝野鉄幹

**春寒し造船所こそ悲しけれ**
**浦賀の街に黒き鞆懸く**
与謝野晶子


★参考文献
・横須賀こども風土記（中巻）
横須賀市生涯学習財団
・三浦半島の史跡みち　鈴木かほる
・歴史のまち浦賀てくてくガイド
浦賀歴史研究所



発行：浦賀行政センター　編集：浦賀コミュニティセンター分館
〒239-0822 横須賀市浦賀７－２－１　☎ 046-842-4121　休館日 12/29～１/３

# 歴史語らい座・浦賀 四十

郷土史家 山本 詔一

## ●『近世浦賀畸人伝』Ⅳ●

―須田文里―

須田文里は六郎左衛門といい、家は「尾張屋」の屋号をもつ、東浦賀の干鰯問屋であった。東浦賀の干鰯問屋は同時に浦賀奉行所の足軽役として、江戸へ上り下りする廻船の荷物と乗組員の検査をする「船改め」をする廻船問屋でもあった。そのことを畸人伝の文中で「昼は公の務また産業のいとなみあれば」と記している。

俳諧は趣味の域を脱しており、最初越谷吾山の門人となり、春日庵と号した。越谷吾山は滝沢馬琴の俳諧の師でもあり、俳人としても名を残しているが、方言の研究者として日本最初の方言辞典『物類称呼』という書物を著したことで有名である。吾山と文里はどのような繋がりで師弟の関係になったのであろうか。吾山の句集『東海藻』に東浦賀連として宮原石二（治兵衛）の名が見えることから、東浦賀干鰯問屋のリーダー格の宮原治兵衛さんの紹介によるもと思われる。

吾山の死後、文里は官鼠（陶官鼠とも言う）に師事している。官鼠は伊豆三津の生まれで、沼津に庵をもち、芭蕉の顕彰に力をいれた俳人であった。官鼠の門弟になると文里は嵐斎と号した。官鼠や石蘭（この人物は不明・名古屋に奥村石蘭という俳諧と絵画をする文人がいたので、文里が尾張屋であったことから何か繋がりがあるかと思ったが、名古屋の石蘭は文里が亡くなった後の生まれであったので、無関係）は文里を奇才としている。

また、文里はお酒が好きで、夜会を開き、ここに様々なジャンルの人々を呼んで酒と遊びと談義をし、文里自身は揚弓を射ることが得意で、どんなに酔っていても百発百中の腕前であった。

こうした文里も寛政七年（一七九五）三月、**「ちるか花　われも去る世の　夕嵐」**という辞世の句を残して四十六年の生涯を閉じた。

―渋谷杞柳―

渋谷杞柳は名を宗哲という医者である。渋谷家は元禄年間に兄・宗哲が浦賀で、弟宗碩が長井で開業したという。享保七年（一七二二）の東浦賀村の「村差出帳」に「本道・渋谷宗哲」とある。また文政五年（一八二二）の東浦賀村の「村明細帳」によると津田養俊・奥山左門とともに渋谷の名があり、奉行所が浦賀に設置されてからは、奉行所の御目見医としての格式をもっていた。しかし、畸人伝で紹介されている杞柳は、寛政八年（一七九六）八月に三十八歳で没しているので、この差出帳と明細帳の渋谷宗哲は畸人伝で紹介された人物ではない。

畸人伝の宗哲は、奥州三春の生まれで、江戸に来て医学を学んでいるときに佐川三順という人物の仲介で渋谷家に養子に入った。

石獄堂や業廣と号して、学問をよくやり、特に漢詩が上手であった。たくさん遺稿があったが、火災ですべてを失くしてしまったと編者の樋口有柳は残念がっている。すべて焼失してしまったが、先に紹介した宮原石二を送る時のものが耳に残っていると五言律詩が記されている。その最後に「言を紀州の楽に寄せ　熟此の地に遊べり」と故郷の紀州での楽しさに思いを寄せ、この浦賀で遊学のすべてをマスターしたのでは・・・。

杞柳はこの他には、蹴鞠が師範級の腕前であり、囲碁・将棋も負けること知らず、それでいて、庶民と同じような着物を着て、決して偉ぶらないところが、優れた人物である証拠である。俳諧もやるが自己流で、四季の移り変わりを思うままに詠っている。

## 笑話一題

新年めでたく明けましたところで小噺をひとつ。

浦賀燈明堂をこよなく愛する金さん、暇があれば散歩に出かけ、一服するのが何よりの楽しみです。

今日も正月早々散歩に来て、海をながめながら気持ちよく一服しておりました。そこへ、若く美しい娘がやってきて金さんに向かってニコッと笑いかけたのでございます。生まれてこの方、こんな年は初めてです。すっかりのぼせ上がった金さん〝今年は正月から縁起がいいぞ、何かいいことが起こりそう〟なんてその気になって、にやにやしながら娘に話しかけようと吸っていた煙草をいつもやっているようにポイッと捨て、娘に近づいた途端、「おまえ、今、吸い殻を捨てたな！」と今までの可愛いかった娘の顔が鬼夜叉の面相に一変し、いきなり襲ってきたのです。金さんは、余りの恐ろしさに腰を抜かして動けなくなってしまいました。金さんの初夢の話でございます。

皆様もどうぞ悪い夢を見ないよう、燈明堂はもちろん浦賀の街をきれいにする為にルールを守りましょう。金さんからの切なる願いでございます。

それでは今年も「浦賀文化」をよろしくお願い申し上げまして、小噺をしめさせていただきます。

（金さん）

歴史講座
**三浦一族 超入門講座**

三浦一族興亡の歴史を、時代背景や様々な逸話とともに学ぶ、初級者向けの講座です。

＊＊＊＊＊

**浦賀コミュニティセンター分館**
**2/14・21・28、3/7・14**
**毎回土曜日　9:30～11:30**
（※3/14は見学のため12時まで）

詳細、申込み方法は「広報よこすか」「浦賀TODAY」をご覧ください。

浦賀・中島三郎助に因んだ俳句を募集しています。詳細は、浦賀コミセン分館職員までお問い合わせください。